

過去の否定事態を表すシテイナイ¹⁾における 話し手の心的態度と表現効果

楠本 徹也

はじめに

1. 考察対象となるシテイナイ
2. シテイナイにおける答え手の心的態度
 - 2.1. 先行研究
 - 2.2. シテイナイの使用要因
3. シテイナイの表現効果
 - 3.1. 未知・意外感の表出
 - 3.2. 事態への関与の能動的回避・否定

おわりに

はじめに

本稿はある行為が過去に行われたか否かを「何々シタカ」と過去形で問う質問に対して、その否定の応答においてシナカッタとシテイナイの2つの形の使用が可能である現象に注目し、シテイナイのように質問とテンスが合わない応答がなぜ成立するのかを考える。

過去の行為的出来事の成否を問う質問に対して否定の応答をする場合、以下の例に示すように2通りの言い方が見られる。

- (1) 「ゆうべ飲み会に行った？」
- a. 「いいえ、行かなかった」
 - b. 「いいえ、行って(い)ない²⁾」

初級レベルの日本語学習において行われる単純な対話型ドリルでは、例えば「行きましたか？」の質問に対して「はい、行きました」「いいえ、行きませんでした」というように過去形に対しては過去形で答えることが求められる³⁾。しかし、否定の応答においては(1b)のように質問との時制の一致が見られない場合もある。これは、「えっ、行って(い)ないよ。ゆうべ飲み会があったなんて知らなかった」というように答え手が質問内容における出来事を知らない場合に可能である。松田(2002:40)が指摘しているように、(1a)のようなシナカッ

タという応答は答え手が問われている出来事を予め知っていることが前提であり、そうでなければ「単なる事実報告」(松田 *Ibid.*)として(1b)のようにシテイナイが選択される。

しかし、答え手が質問内容における出来事を知っている場合でもシテイナイが応答に使われることもある。例えば、(1)において答え手が飲み会のことは知っていたが翌日の試験のために行かなかった場合、「行って(い)ないよ。次の日試験があるのに行くわけないでしょ」というようにシテイナイを選択して答えることが出来る。

それでは、過去の行為的出来事に対してシテイナイを選択する動機は何なのか。それを探り体系化してみるのが本稿の目的である。

なお、何々シタカの質問にシナイ、シテイナカッタで応答することも可能である。

(2) a. 「評議会へはいったんですか？」

「いきません。」

(むらぎも) (高橋 1988:79)

b. 「昨日、私の悪口言ったでしょ」

「悪口なんか言わない(よ)」

(工藤 2014;232)

(2ab)においては応答にシナイが使われている。これは質問に表れる「運動の有無だけ」が問題とされ、「その運動の有無さえこたえれば、ほかのことには無関心であってもよい」という文脈的条件のもとで起こると高橋 (*Ibid.*, p.86)は指摘する。また、工藤 (*Ibid.*, p.237)は否定とテンスの関係で、「聞き手の肯定的想定(判断)に対して、それは事実ではないと打ち消すモーダルな意味が前面化」していると主張する。

(3) 「ゆうべ飲み会に行った？」

「いいえ、行って(い)なかったよ」

(3)のように応答にシテイナカッタを使うのは、かなり文脈的制約を受けるが可能である。例えば、「ゆうべ飲み会に行ったでしょう。みんなといるのを見たよ」「えっ？ 僕は行って(い)なかったよ。人違いでしょ」というようなやりとりで使えるのではないだろうか。このシテイナカッタはシテイナイと交換可能だが、これに関して高橋 (*Ibid.*, p.90)は「『していなかった』は『していない』にくらべてなんとなくデキゴト描写的なような気がする」と述べている。

本稿では、シナイ、シナカッタ、シテイナカッタに関して詳しく言及はしないが、シテイナイとの比較において必要な場合に限り適時取り上げる。

1. 考察対象となるシテイナイ

本稿では以下のやりとりの応答に表れるシテイナイを考察の対象とする。

(4) (警察の取り調べ室。刑事 A は容疑者 B を取り調べている) ⁴⁾

A 「おまえがやったんだろ」

B 「いいえ、私はやって(い)ませんよ」

(5) (A は友人 B らしき者をゆうべ新宿で見かけた)

A 「ゆうべ新宿に行かなかった？」

B 「えっ？ 新宿なんか行って(い)ないよ」

(6) 「お母さん、今日、国電か私鉄のスト、あったっけ？」

「さあ、聞いてないね」

(女社長に乾杯)

(4) (5) (6) に共通する特徴として、まず、質問者が特定の行為的出来事が過去に起こったであろうと想定していることが前提となっている。この肯定的想定は必ずしも質問文においてシタという肯定の過去形で表されているとは限らず、(5) のようにシナカットを使った否定疑問文でも表される (楠本 1994:2)。また、(6) では今日電車のストがあるかどうか母親が知っているであろうと質問者が想定して質問している。これは文脈上の解釈として肯定的事態を想定している場合である。このように、質問文がシタで表示されなくとも、質問において過去の行為的出来事に対する肯定的想定が認められれば、応答においてシテイナイの使用が動機付けられる。

次に、応答におけるシテイナイは行為的出来事に対して過去 1 回限りの共時的非実現を表す。以下 (7) のようなある一定の時間枠の中での出来事の不成立を表すシテイナイは本稿の考察対象ではない。

(7) 「最近カラオケに行った？」

「いやあ、ここ数ヶ月行って(い)ないね」

また、「まだ」と共起するシテイナイも考察の対象外である。

(8) 「昼ご飯食べた？」

「いいえ、まだ食べて(い)ない」

(8) では「食べていない」状態の継続性や「いつかは食べる」といった肯定事態の実現可能性が含意される。このような効力持続のAspect解釈は本稿の考察対象であるシテイナイには有効とされない。

本稿の考察対象であるシテイナイを「この本は前に一度読んでいる」のような経験・記録を表す用法に近いもの(高橋 *Ibid.*, p.89)であり、そこにパーフェクト性を認める見方(工藤 1989)もあるが、松田 (*Ibid.*, p.39) が指摘するように、否定形シテイナイ(例「イタリアに一度も行っていない」)においては過去にシタ(「イタリアに行った」)という効力が持続していない、または過去にシナカッタ(「イタリアに行かなかった」)という効力が持続しているとは考えにくく、シテイナイにパーフェクト性を認めるのは難しい。

以上、本稿の考察対象であるシテイナイの構文的特徴を明らかにしたが、次にそれがどのように使われるかということ、答え手の心的態度、特に答え手のシテイナイを選択する動機付けは何かということに焦点を当てて考えてみたい。

2. シテイナイにおける答え手の心的態度

2.1. 先行研究

まず、シテイナイの使用における話し手の心的態度に関して、先行研究ではどのように言われているかを見てみる。

一つは、問われている行為的出来事に対する答え手の「否認」が見られることが指摘されている(小泉 1993:120、井上 2001:135、工藤 2001:232)。

(9) ((4) を再掲)

(警察の取り調べ室。刑事 A は容疑者 B を取り調べている)

A 「おまえがやったんだろ」

B 「いいえ、私はやって(い)ませんよ」

(10) 甲：乙さん、この間、電車の中で女の人とキスしてたでしょ

乙：何言ってますか。キスなんかしてませんよ。(井上 *Ibid.*, 例 (96) より)

(11) 洋子 「お義母さんっ。菓っ」

と菓を手にと和子の部屋へ。

和子「いやよっ。さっき薬飲んだもん」

洋子「飲んでないでしょっ！」

(凶悪)

(9) (10) (11) においては、問われているまたは話題になっている行為的出来事を答え手が強く否認しているのが分かる。この場合、応答におけるシテイナイはシナイと代替可能で、シナイにすると「否認というモーダルな意味がはっきりと出てくる」(工藤 *Ibid.*) ことが見られる。

二つ目は、シテイナイには「発話時の判断として、事実を提示する」機能が認められている(松田 *Ibid.*, pp.39-41)。例えば、(9) において、答え手 B はやっていないことを主張しなければ今の時点でまたはこの先当人にとって不利になることが予想される状況であるとの判断で、やっていないという事実を述べていると解釈できる。

以上のことから、シテイナイは動作を否定するのではなく、出来事が生じた事実を否定しており、この事実の否定が「否認」という発話態度となる。これがシテイナイの使用を動機付ける要因である。

本稿においては、基本的には松田の主張を支持するが、さらに一步進んで、では、事実を提示する判断はどのようになされるのか、即ち、話し手がどういう気持ちでわざわざ事態の否定を事実として表すのかという視点から考察を進める。

2. 2. シテイナイの使用要因

シテイナイが使用される要因は何か、それをシナカッタと比較して明らかにしてみる。

(12) (A は B にゆうべ飲み会の後、二次会に行ったか聞く)

A 「ゆうべ飲み会の後、二次会に行った？」

B1 「いや、行かなかった」

B2 「いや、行って(い)ないよ」

(12) の答え手 B1 ではシナカッタが使われているが、ここでは答え手の個別的行為としての意志・意図性が感じられ、以下 (13) において [] 内に表されているような意志・意図に影響する個別事情と共起しやすい⁵⁾。

(13) ((12) を再掲・改変)

「ゆうべ飲み会の後、二次会に行った？」

「いいや、

夜遅かったから
用事があったから
疲れていたから
お金がなかったから
行きたくなかったから

」行かなかった」

(13) の [] 内では、行為を意図的に不成立にした理由が述べられているのが分かる。一方、(12) B2 においては、以下 (14) のようにシテイナイは [] 内の表現と共起しやすいことが観察される。(() 内の句は述語を補完する例えて、後の述語列のどの述語にも係る)。

(14) ((12) を再掲・改変)

「ゆうべ飲み会の後、二次会に行った？」

「いいや、行って(い)ないよ。

(金がかかるのに)	行くわけないでしょ
(試験が近いのに)	
(あんな連中と)	行ってはいけないでしょ
(二次会嫌いなのに)	
(二次会あるのが)	行かないといけないの
知らなかったのに)	

」

(14) では応答において二次会に行ったという事実はないことが表明され、その後「行かないのは当然である」「行く必要はない」「行くべきではない」といった答え手の心的態度を表す表現が続く。() 内はその心的態度をとる根拠となる。このように、シテイナイの使用において、当為・当然といったモーダルな有標性が表れることが認められる⁶⁾。ということは、質問における行為的出来事に対する答え手の「当為・当然」評価がシテイナイを選択する動機となると言えるのではないだろうか。言い換えれば、評価性が発話において優先されるため、その評価の対象として行為的出来事が捉えられ、それがシナカッタによる動作否定よりシテイナイによる事実的描写に繋がるということである。

以上、シナカッタは意志・意図に影響する個別事情を表す言い方と、シテイナイは「当為・当然」評価を表す言い方と共起しやすいことが見られたが、これはすべての文脈で有効であるとはもちろん言えない。例えば、「二次会には行って(い)ない。夜遅かったから」と言っても発話の自然さは保たれる。しかし、これは否定事実とその理由が並列的に述べられており、「行って(い)ないよ。行くわけないでしょ」に見られるような、行為的出来事を否定事実として対象化した上で「当為・当然」評価を述べるといった二つの文の間の強い繋がりが感じられない。このこ

とから、シテイナイと「当為・当然」評価は親和性が高く、これが表現上の共起のしやすさに繋がっていると言えるのである。

3. シテイナイの表現効果

シテイナイの使用はどのような表現効果を生むのだろうか。発話内行為⁷⁾としての視点から考えてみる。既に行為的出来事に対する答え手の否認が見られることを述べたが、さらに詳しく調べ、どういう場合にどのような表現効果があるかを明らかにしていく。

3. 1. 未知・意外感の表出

シテイナイの使用において、質問される行為的出来事の前提となる事態を答え手が知らず質問者と答え手の間に情報の共有がなされていない場合がある。

(15) ((1) を再掲・改変)

「ゆうべ飲み会に行った？」

「いや、行って(い)ないよ。飲み会なんてあったの？」

(16) ((5) を再掲)

(A は友人 B らしき者をゆうべ新宿で見かけた)

A 「ゆうべ新宿に行かなかった？」

B 「えっ？ 新宿なんか行って(い)ないよ」

(17) 「ゆうべのパーティーでマナさんに会った？」

「えっ、会って(い)ないよ。マナさん、パーティーに来てたの？」

(15) (16) (17) において、質問者と答え手の間で行為的出来事が共有知識となっていない。答え手にとってはそれぞれ「ゆうべ飲み会があったこと」「新宿へ行ったこと」「マナさんがパーティーに来ていた」ことは全く未知のことである。知らないからそれに関わる行為的出来事の成立は当然肯定できないという当為判断のもとでシテイナイが使われている。同時に、未知のことにに関して聞かれたことで答え手に意外であり戸惑っている様子が窺われる。

このように、前提となる共有知識がない状況においてシテイナイが使われる場合、問われる行為的出来事の不成立という事実とそれに伴う答え手の意外感や戸惑いが表出される。

3. 2. 事態への関与の能動的回避・否定

シテイナイは質問における行為的出来事に関して答え手が質問者と情報を共有している場合においても使われる。

(18) 「あのこと、みんなに喋っただろう」

「いいや、誰にも喋って(い)ないよ」

(19) ある晩、ふとんべやに隠れていると、突然、秋太郎がやってきた。こんなところを主人に言いつけられては、たまらないから、吾一は青くなって、読みさしの本を夜具の中に突っこんだ。

「何してたんだい。」

「いいえ、なんにもしてやしません。」

吾一の声はふるえていた。

(路傍の石)

(18) (19) において、質問者と答え手の間に質問における行為的出来事の前提となる共有知識(それぞれ「噂となる事柄がある」「夜にこそこそと何かしている」ということ)が存在する。意外感未知の出来事に対して表出されるので、この場合は答え手に意外感はない。その代わりに、答え手において「そんなことをするわけがない」「そんなことをしてもしょうがない」「そんなことをする必要さえもない」といった気持ちが感じ取れる。これは答え手が当該事態への関与を能動的に回避または否定している表れである。

答え手の事態への関与の能動的回避・否定は以下の例において強く表れている。

(20) 「何してたんだ？」

「何もしていないわよ。ばかね。今日は口をききたくないの。黙っておいで！」

(あすなろ物語)

(21) ((4) を再掲)

(警察の取り調べ室。刑事 A は容疑者 B を取り調べている)

A 「おまえがやったんだろ」

B 「いいえ、私はやって(い)ませんよ」

(20) では、答え手において質問者と関わりたくない気持ちが強く表れているのが分かる。(21)

では、答え手である容疑者は、取り調べで話題となっている事件に関して身に覚えがないことを表明、または身に覚えがないふりをしていることが読み取れる。答え手が事件の存在を全く知らないならば、情報の共有がなされず未知・意外感の表出が見られるだろうが、取り調べの現場では話題となる事件が共有知識となっている前提で取り調べが行われるので、情報の共有がなされていると見做される。そこで、答え手は自己保身のために自身にとって不都合となる事態への関わりを強く回避または否定している。このように事態への関与を能動的に回避または否定するためにシテイナイを使うことは次の例においても見られる。(下線は筆者)。

(22) 事務にはすでに内藤が来ていた。リングの前で、野口と口を尖らせながら喋っている。
私の顔を見ると怒ったように言った。「俺は知らないよ、何もしていないよ」(一瞬の夏)

(23) ドアをあけると、速達の配達人だった。なにごとならん？と復習の鬼は差出人をみた。
そこには「クサキサンスケ警察長官」とあった。…(略)… 復習の鬼はすこし不安になっ
て呟いた。「おれ、あのあとべつに盗作やってないし、警察によばれるおぼえないんだ
けど」
(ブンとフン)

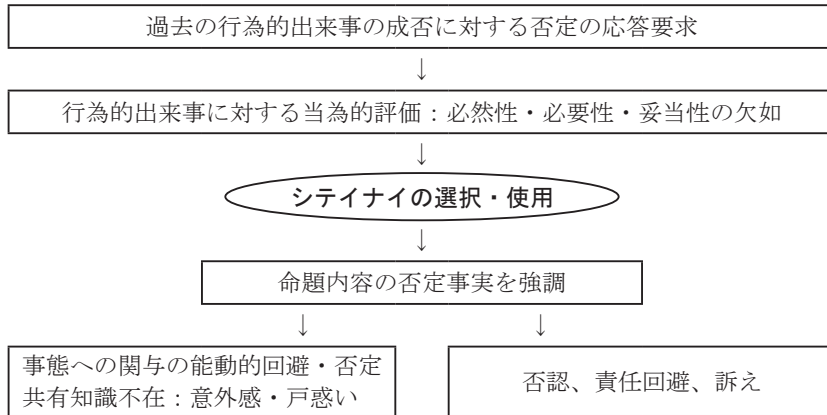
(22) (23) において、下線部をそれぞれ「何もしなかった」「盗作やらなかった」とすると、過去に行為が行われなかったことを表すのみで、文意が変わってしまう。ここでのシテイナイは何か質問されてそれに直接答えるものではないが、(22)では「私の顔」の表情が「おまえがやったのか」と無言で問い詰めていることが、(23)では警察長官からの手紙が「おまえが盗んだのだろ」というサインを発していることが読み取れる。このように前提となる状況が文脈により示され、それに対する応答としての発話にシテイナイが使われる場合においても、共有知識の存在が確認され事態への関与の能動的回避・否定が表出されることが認められる。

なお、事態への関与を回避・否定することは、前節で述べたような答え手が事態について未知の場合においても見られることである。しかし、その場合、共有知識の不在による意外感や戸惑いのほうが優先的に表出され、事態への関与の回避・否定は共有知識が存在する場合ほどには積極的に表されない。

おわりに

これまでの考察をまとめて以下のように図示する。

(24) シテイナイにおける答え手の心的態度と表現効果



過去の行為的出来事の成否に対して否定の応答が行われる場合、答え手の中で「そうであるわけではない」とか「そうである必要はない」といった当為的評価がなされ、それが動機付けとなり答え手はシテイナイを選択し命題内容の否定事実を強調する。その結果、発話内行為として事態への関与の能動的回避・否定が表れる。問われる事態が未知の場合、意外感・戸惑いが優先的に表出される。

シテイナイはもともと否定事態を事実として提示する働きを有する。つまり事実志向的なものである。事実志向的であるということは命題内容の事実性を強調することであり、そこにモダリティな有標性が表れ、相手の言っていることを否認したり、自分の責任を回避したりするといった表出がなされる。その表出が強い場合は、訴えるという行為となるのである。

以上、過去の行為的出来事の不成立を表すシテイナイの用法を答え手の心的態度と表出される発話内行為に焦点を当て考察した。話し手が事態をどう受け止めるかという視点での分析は日本語教育への応用性が高い。本研究はその一端を担うものである。分析に関して、幅広くコーパスを使った検証による更なる精緻化が今後の課題である。

注

- 1) 本稿では動詞の各アスペクト相を工藤（2014:211）にならい以下のように表す。

	完成相 非過去	完成相 過去	継続相 非過去	継続相 過去
肯定	スル	シタ	シテイル	シテイタ
否定	シナイ	シナカッタ	シテイナイ	シテイナカッタ

- 2) 「動詞テ形+いない」は口語体では「動詞テ形+ない」という縮約形となる。本稿では「～て(い)ない」と表記する。但し、実例においては実例の表記に従う。
- 3) このようなパターン化が日本語教科書に見られ、実際の日本人との会話における答えとの相違が学生を混乱させるとポリー・ザトラウスキー（1983:48-49）は述べている。

- 4) 高橋 (1988:88)、松田 (2002:40) における例を参考に筆者が作例。
- 5) 松田 (*Ibid.*, pp.40-41) において「シナカッタは『事情説明』(明示化されない場合もある) などとともに回想的モードを含みつつ語る語り方である」と述べられている。
- 6) 当為・当然が含意されるシテイナイはシナイと代替可能であり、「シナイ形式では当然性というモーダルな意味が前面化する」ことが工藤 (*Ibid.*, p.245) により指摘されている。
- 7) John L. Austin (1962)。

参考文献

- 庵功雄 2001 「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4号、pp.75-94.
- 井上優 2001 「現代日本語の『タ』—主文末の『…タ』の意味について」つくば言語文化フォーラム(編)『「た」の言語学』ひつじ書房、pp.97-163.
- 井上優 2011 「動的述語のシタの二義性について」『国立国語研究所論集』第1号、pp.21-34.
- 江田すみれ 2013 『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト』くろしお出版
- 楠本徹也 1994 「否定疑問文とその応答に関する覚え書」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第20号、pp.1-14.
- 工藤真由美 1989 「現代日本語のパーフェクトをめぐって」言語学研究会編『ことばの科学』3、pp.53-118.
- 工藤真由美 1996 「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」言語学研究会編『ことばの科学』7、pp.81-136.
- 工藤真由美 2014 「否定述語のモード・テンス・アスペクト」『現代日本語モード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房、pp.231-261.
- 小泉保 1993 「第3章 形態論」『日本語教師のための言語学入門』大修館書店、pp.89-154.
- 高橋太郎 1988 「うちけしのテンスについて」『麗澤大学紀要』第47巻、pp.75-96.
- 谷口秀治 1997 「テイル形に関するモード的側面の考察」『日本語教育』92号、pp.143-152.
- ポリー・ザトラウスキー 1983 「プラグマティクスから見た日本語の動詞のアスペクト—特に否定形の場合において」筑波大学『言語学論叢』2号、pp.48-64.
- 松田文子 2002 「『過去時ニ〜シタカ?』に対する否定の返答形式—シテイナイとシナカッタの選択に関して—」『日本語教育』113号、pp.34-42.
- Austin, John L. 1962. *How to Do Things with Words*. Cambridge. (坂本百大訳『言語と行為』大修館書店)
- Jorden, E.H., with Mari Noda. 1987. *Japanese: The Spoken Language Part 1*. Yale University Press. pp.278-280.

用例出典

- 赤川次郎『女社長に乾杯』(『新潮文庫 100 冊』CD-ROM)
- 井上ひさし『ブンとフン』(『新潮文庫 100 冊』CD-ROM)
- 井上靖『あすなる物語』(『新潮文庫 100 冊』CD-ROM)
- 沢木耕太郎『一瞬の夏』(『新潮文庫 100 冊』CD-ROM)
- 高橋泉、白石和彌『凶悪』(『'13年鑑代表シナリオ集』日本シナリオ作家協会編)
- 中野重治『むらぎも』(新潮文庫)
- 山本有三『路傍の石』(『新潮文庫 100 冊』CD-ROM)

付記

本稿は、2015年度日本語教育学会秋季大会(2015.10.11 沖縄国際大学)での口頭発表をもとに加筆・訂正したものである。

Modal Elements and Effects of Expression in the Use of the “-te inai” Form as a Negative Response to Questions about the Past Event Using the “-ta” Form.

KUSUMOTO Tetsuya

The present paper addresses the modal elements involved and the illocutionary acts performed in using the “-te inai” form as a negative response to questions about the past event using the “-ta” form, as in the following exchange: “*Yuube nomikai ni itta?* (Did you go to a drinking party last night?)” “*Iie, itte inai* (No, I didn’t go there).”

It is observed that the “-te inai” form is used as a negative response when the speaker evaluates the past event asked in the question in light of its necessity and possibility and expresses his/her feeling implicitly as in “*Sonna wake wa nai* (It can’t be that…)” and “*Sore wa arienai* (There is no way that…)”.

The “-te inai” form discussed basically denotes nonoccurrence of the past event as a truth and focusing on such a negative state reflects the speaker’s attitudes of denying the occurrence of the past event and avoiding his/her responsibility of its occurrence, which leads to an act of appeal if maximizing its effect. When the speaker is asked about the past event which s/he does not know, which means s/he does not share the knowledge about the occurrence of the past event, a sense of unexpectedness and puzzlement s/he feels is expressed by using the “-te inai” form.

The “-te inai” form discussed here is popularly used in actual Japanese conversations. A further analysis using a wide range of corpus is expected. I hope that this paper will be an important contribution to the study of pragmatic functions of Japanese language.